

ブリヤート語分詞の定動詞化は一方向の変化か：主節述語における定動詞・分詞の「中和」

山越康裕 (東京外国語大学 AA 研)

yamakoshi@aa.tufs.ac.jp

要旨

ブリヤート語を含むモンゴル諸語の記述において、動詞は定動詞(主節述語専用形式);副動詞(副詞節述語専用形式);分詞(名詞節・連体節述語形式/言語によっては主節述語形式としてもふるまう)という三つの屈折範疇があるとされる。ブリヤート語ではこのうちの分詞が、定動詞直説法と同じく主節述語として多用される。これは分詞が finiteness を獲得し、定動詞のようにふるまうように通時的に変化したと推測される。ただし、分詞の定動詞化という一方向の現象ではなく、定動詞も、本来は名詞類(分詞も含む)のみをホストにとる次のような非自立形式を接続・後続しうる: 1) 否定接尾辞 *-gui*, 2) 「説明」のモダリティをあらわす小詞 *=yum*。つまり、分詞が定動詞化しているだけでなく、定動詞も分詞の特徴を獲得しており、双方向の変化により両者の形態統語機能が中和しているといえる。この二つの特徴は、主節述語以外の位置では観察されないため、両屈折範疇を区別すること自体は有効だが、動詞屈折体系の枠組、「言いさし」、否定接尾辞 *-gui* を含む形態素の整理等検討すべき課題もある。

0. はじめに

本発表では、モンゴル諸語のブリヤート語を対象に、動詞述語文の述語動詞の特徴について記述し、分詞(先行研究では形動詞とも)と定動詞という動詞の2種類の屈折範疇が、主節述語位置では互いの形態統語的特徴を共有するよう変化していることを述べ、文法記述上今後検討すべき点を列挙する。

1. ブリヤート語の概観

本発表で扱うブリヤート語は中国内モンゴル自治区北部、フルンボイル市エウエンキ族自治旗シネヘン・ソムに暮らすブリヤートおよびハムニガンと呼ばれる人々の多くが母語とするモンゴル系の言語、シネヘン・ブリヤート語を指すものとする。当該言語はロシア連邦ザバイカリエ地方のアガ・ブリヤート語と音韻・文法特徴は概ね同じである。言語によって使用される。SOV、修飾語(句)-被修飾語の基本語順であり、従属節は主節に先行する(=主節述語は原則文末に位置する)。接尾辞のバリエーションが豊富な膠着的言語で、語形成だけでなく名詞の格標示や動詞の屈折も接尾辞の接続によって示される。次の(1)はSOVからなる補文節を含む一文で、動詞の屈折等が接尾辞で示されている。

- (1) *bii* *altan* *seezi-tei* *mungen* *bugse-tei* *xubuu* *tur-eed*
 [[[1SG:NOM(S) [[golden breast-PROP] [silver buttocks-PROP] boy:INDF] bear-CVB.PFV
bai-xa =bi *ge-z'ie* *xel-be* *ge-ne*.
 be-PTCP.FUT =1SG] say.that-CVB.IPFV tell-IND.PST] say.that-IND.PRS]

「『私は金の胸と銀の尻をした男の子を生んでおきます』と言ったそうな。」 [shibur_003goldsilverchild:013]¹

名詞類(名詞・代名詞のほか形容詞・数詞なども含む)と動詞はそれぞれの語幹が接続可能な屈折接尾辞類が決まっており、それが品詞分類の基準となる²。品詞を転換するためには語幹に派生接尾辞

¹ 発表者の現地調査により得たデータは[]で示す。[]コロン前は談話データID、コロン後は対応する行番号。談話データIDはYamakoshi (2020)内 <https://mongolictxt.aa-ken.jp/detail/> 以下のディレクトリに対応する。

² 名詞語幹と動詞語幹は厳密に区別されるが、例外として中国語から借用された語彙にのみ、動詞語幹がとる屈折接尾

を接続することで新たな語幹を作る。さらに動詞は、動詞語幹に分詞接尾辞（屈折接尾辞の一範疇）が接続すると、節内の項構造を保持したまま節全体が名詞・形容詞的に機能する。つまり分詞は「動詞→形容詞への屈折的転換」（Haspelmath and Sims 2010: 257）という通言語的定義にあてはまる。以上の特徴は周辺のモンゴル諸語も共有している。

隣接するモンゴル語と異なるブリヤート語の特徴は、述語に付される人称標示である。主節述語には述語人称小詞（(2)文末）、従属節述語の一部には所有人称小詞（(3a)文中）がそれぞれ後接する。述語人称小詞の接続先となるホストの品詞の別を問わない。たとえば (3a) では動詞の定動詞現在形、(3b) では名詞をホストとしている。

- (2) *sii ire-xe-de =m juu x-eed bai-xa =b =sja.*
 2SG:NOM come-PTCP.FUT-DAT =1SG:POSS what:INDF do-CVB.PFV be-PTCP.FUT =Q =2SG

「私の来た時にお前は何かをしておくのだ」 [shibur_003goldsilverchild:007]

- (3) a. *ɔdɔ ii-g-eed bii basgan-ai =tni altan bieheleg bid'er-ne =bi.*
 now do.like.this-E-CVB.PFV 1SG:NOM girl-GEN =2SG.HON gold ring:INDF search-IND.PRS =1SG

「さあ娘さんの金の指輪を探しますよ」 [shibur_006pigfortuneteller01:039]

- b. *bii xɔrin tab-tai =bi.*
 1SG:NOM [twenty five-PROP] =1SG

「私は 25 歳です」 [shibur_001shibur_dc:04-02]

2. ブリヤート語の動詞屈折範疇

ブリヤート語を含むモンゴル諸語における動詞の屈折範疇は、統語的特徴からこれまで定動詞（直説法と希求法に下位区分される）、副動詞、分詞（形動詞）の三つの範疇に分類され、記述されてきた。モンゴル諸語全般に共通して、定動詞 (finite verb) は主節述語専用 (4) の形式範疇、副動詞 (converb) は副詞節述語専用 (5)、分詞 (participle/verbal noun) は名詞修飾節 (6)・名詞節述語として用いられる。ブリヤート語の分詞は、名詞修飾節・名詞節述語としてだけでなく、主節述語 ((5)文末) としても頻繁に用いられる。分詞が主節述語として用いられる傾向はモンゴル諸語の現在の分布において東北部に位置する言語（とくにブリヤート語、ハムニガン・モンゴル語）ほど発達している（山越 2021: 137）。

表 1. ブリヤート語の動詞屈折範疇と統語機能

	定動詞	分詞（形動詞）	副動詞
主節述語	○	○	—
名詞修飾節・名詞節述語	—	○	—
副詞節述語	—	—	○

- (4) *ʈii-xe =n бага xatan =in xel-z'e bai-na ge-ne.*
 do.in.that.way-PTCP.FUT =3:POSS little queen:NOM =3:POSS tell-CVB.IPFV be-IND.PRS say.that-IND.PRS

「すると年下の妃は言うそうなの。」 [shibur_003goldsilverchild:012]

- (5) *ii-g-eed tereen-ii xɔrs-ɔɔd ataarx-aad tere xubuu-jii =n tere*
 do.in.this.way-E-CVB.PFV 3SG-ACC hate-CVB.PFV envy-CVB.PFV that boy-ACC =3:POSS that

辞と名詞類語幹がとる格接尾辞の双方を接続できる語幹が観察される。

zarsan-ood-aar-aa hemee-xen xel-eed uuden-ei-ŋgaa bəgəhə dər bol-ool-aa.
 servant-PL-INS-REFL gently-DMN tell-CVB.PFV door-GEN-REFL sill under bury-CAUS-PTCP.IPFV

「こうして彼女を忌み妬んで、召使にその子を敷居の下に埋めさせた。」 [shibur_003goldsilverchild:021]

(6) *nege xadam-da ʌsi-hən egsi-iin-de ailsial-zia ʌsi-bə ge-ne.*
 one bride-DAT reach-PTCP.PFV elder.sister-GEN-DAT visit-CVB.IPFV reach-IND.PST say.that-IND.PRS

「嫁入りした姉の家に行ったそうなの。」 [shibur_009tenegtarib:017]

2.1 分詞の定動詞化

上述の通りブリヤート語では分詞は主節述語としても頻繁に用いられる（上例 (5)）。山越 (2017) では、分詞の主節述語用法が非常に制限されている。13 世紀の中期モンゴル語との比較を通じて、現在のブリヤート語が中期モンゴル語に遡れるわけではないが、1) 他のモンゴル諸語では中期モンゴル語同様、もしくはそれよりも厳しく主節述語用法が制限されていること、2) シベリア地域の他の言語でも文法化によって分詞が定動詞的に用いられるように変化しているという Malchukov (2013) の仮説を傍証として、もともと名詞節・名詞修飾節述語用法に制限されていたブリヤート語の分詞が定動詞のもつ主節述語用法を獲得した、つまり定動詞化したと結論づけた。

2.2 定動詞の変化

一方、談話テキストを精査すると、定動詞直説法の側も変化したと思われる用例が確認される。ブリヤート語の主節述語専用形式である定動詞直説法を観察すると、次のような現象がみられる。a) 名詞類に接続する否定接尾辞 -gui の接続 (7)、b) 名詞類述語に後続し、話者の判断に基づく「説明」(ジンガン 2010: 254) を示す接語 =jum の後続 (8) の 2 点である。(7a)(8a) は定動詞、(7b)(8b) は分詞、(7c) は形容詞がそれぞれホストとなっている例である。

(7) a. *ene xobsahan nam-da taar-na-gui.*
 this cloth:NOM 1SG-DAT fit-IND.PRS-NEG

「この服は私に合っていません」 [shibur_001shibur_dc:15-4]

b. *bidier-eed bidier-eed ʌl-də-xə-gui.* c. *dotoo-gui.*
 search-CVB.PFV search-CVB.PFV find-PASS-PTCP.FUT-NEG short-NEG

「探しても探しても見つからない」 [shibur_005lostmeat:005]

「劣らない」 [shibur_007shamangui:007]

(8) a. *xun-ii jadrāl-iiji hain xar-xa-gui bəl-dəg bai-na =jum.*
 human-GEN poverty-ACC good watch-PTCP.FUT-NEG become-PTCP.HBT be-IND.PRS =MOD

「人の貧しさを考えなくなるのだ」 [shibur_007shamangui:052]

b. *ʌndə mal-ai bəər =haa xoo nege iim bəlsəgər bai-xa =jum.*
 other livestock-GEN kidney:NOM =COND all one like.this smooth be-PTCP.FUT =MOD

「別の家畜の腎臓は、全部つるんとしているんだ」 [shibur_004kidney:004]

この -gui および =jum に対応する語はモンゴル諸語間で共通して広く確認される。しかし、定動詞への接続・後続は、分詞の主節述語用法が比較的観察される近隣のモンゴル諸語でも確認されない。

a) 否定接尾辞 -gui に対応する、近隣のモンゴル語 -güj、ダグール語 uwei の接続・後続はともに名詞類

および分詞では許容されるが、名詞的特徴をもたない定動詞では許容されない。たとえばモンゴル語に関して向井 (2001: 71) は「文の述語となる終止形 (発表者注: 本発表における「定動詞直説法」を指す) の形態があるが、この範疇は直接の否定形を持っていない」とし、動詞文における述語の否定は分詞の否定形 [V-PTCP-*güj*] であらわすと説明する。ダグール語の場合は定動詞直説法の否定形があるが、別の否定詞が定動詞直説法の前に置かれる (NEG#V-IND) 「前置否定 (NEG#V-IND)」 (山田 2019: 81) という方法に拠っており (9a)、*uwei* が後続する否定文には分詞が用いられる (9b)。

(9) ダグール語

- a. *ul* *oo-n*. b. *oo-gu* *uwei*
 NEG drink-IND.NPST drink-PTCP.FUT NEG
 「飲まない」 「飲まない」 (いずれも山田 2019: 82。グロス は 発表者による)

b) 「説明」の =*jum* についても、接語の通言語的特徴を考慮すれば名詞類以外に後続する可能性はあるが、モンゴル語で対応する =*jum*、ダグール語で対応する *jum* とともに定動詞に後続することは許容されない (10b)。モンゴル語については「名詞述語、形容詞述語、形動詞述語まで承接可能」 (ジンガン 2010: 279)、ダグール語については「形式名詞由来の要素であり (中略) 名詞修飾可能な形動詞形の後ろにのみ現れる」 (山田 2019: 122) とそれぞれ説明されている。モンゴル語 =*jum* に関しては、少なくとも共時的には直前の動詞の範疇を制限しており、「*юм* (発表者注: =*jum* を指す) の直前であるために機能に関わらず動詞の範疇が制限されていると解釈する方が整合的」 (向井 2001: 77) という指摘もあるように、この制約は厳密である。以下それぞれモンゴル語 (10)、ダグール語 (11) の例。

(10) モンゴル語

- a. *ir-ex* =*jum*. b. **ir-ne* =*jum*.
 come-PTCP.FUT =MOD come-IND.PRS =MOD
 「来るものだ」 (山田 2019: 120。表記・グロス は 発表者による)

(11) ダグール語

- in* *hii-ǰ* *šad-gu* *yum =dee* *tendee* *panšin aa-ǰ+aa-bei*.
 3SG:NOM do-CVB.SIM be.able-PTCP.FUT MOD =SFP so relief be-CVB.SIM+be-IND.PST
 「彼はできるんだよね。だから安心している」

(山田 2019: 122 (用例初出は恩和巴图 1988: 434)。グロス は 発表者による)

表 2 ブリヤート語分詞・定動詞直説法がとりうる付属語・付属形式

後続する付属語・付属形式	ブリヤート語		cf1. モンゴル語	cf2. ダグール語
	分詞	定動詞直説法	定動詞直説法	定動詞直説法
人称標識のみ伴う	○	○	-(人称標示なし)	○
疑問標識 = <i>gU³</i> (yes/no) / = <i>b</i> (wh)	○	○	○ (=UU / =be)	○ (=yee (yes/no) / ゼロ (wh))
否定標識 - <i>gui</i>	○	○	× (- <i>gui</i>)	× (<i>uwei</i>)
名詞由来と思われる文末小詞 = <i>jum</i>	○	○	× (= <i>jum</i>)	× (= <i>jum</i> , = <i>ǰak</i> , = <i>mookie</i>)
コピュラ由来の文末小詞 = <i>hAn</i>	○	×	× (= <i>san</i> , = <i>dag</i>)	-?

³ 大文字斜体は母音調和による交替形を持つことを示す。

上述の通り a), b) に関する制約が近隣のモンゴル諸語にある一方で、ブリヤート語の定動詞直説法には否定接尾辞 *-gui*, 文末小詞 *=jum* がともに接続・後続しうる。主節述語位置でブリヤート語の分詞、定動詞直説法がとりうる付属語・付属形式をまとめると前頁表 2 のようになる。参考としてモンゴル語・ダグール語の定動詞直説法との対応も示す。近隣のモンゴル諸語に比べブリヤート語では頻繁に主節述語として用いられる一方で、定動詞直説法も分詞（や名詞類）がもつ特徴をかなりの範囲で獲得している。つまり、分詞の定動詞化が進んだ結果、定動詞も主節述語位置において分詞のもつ特徴を獲得し、両範疇の特徴が「中和」しているということが出来る。

ただし、分詞が否定接尾辞 *-gui*, 文末小詞 *=jum* のいずれかを伴って非主節述語として用いられる例があるのに対し、これらを伴った定動詞直説法が主節述語以外の位置であられることはない。つまり定動詞が分詞としての形態統語機能を獲得しているとはいえない。(12) は否定接尾辞を伴った分詞が名詞節述語として用いられた例、(13) は主節述語であるが、直後にコピュラを伴っている（＝コピュラ文の補語となっている）例である。いずれも定動詞直説法では許容されない。

(12) *ɔdɔɔ bid'e xɔjɔr od-xa-gui-da al-ool-x-aa bai-na.*
 now 1PL:NOM two take.time-PTCP.FUT-NEG-DAT kill-CAUS-PTCP.FUT-REFL be-IND.PRS

「ぼくらはまもなく殺されようとしている」 [shibur_011kingandofficer:009]

(13) *ene mɔrgɔn xar-iiji zaald-aa =jum bai-na.*
 this PN black-ACC accuse-PTCP.IPFV =MOD be-IND.PRS

「このモルゴン・ハラを訴えたのだ」 [shibur_007shamangui:017]

3. 文法記述上の検討課題

以上見たとおり、ブリヤート語では主節述語位置で定動詞直説法と分詞との境界があいまいになっている。このとき、文法記述において次のようないくつか検討すべき問題が生じる。以下は発表者自身がまだよりよい結論にたどり着いていない課題でもある。

- モンゴル諸語における分詞の主節述語用法は広義の「言いさし (insubordination)」ともみなせる可能性がある (cf. 山越 2021: 137) が、ブリヤート語に関しても「言いさし」とみなしてよいのか。
- モンゴル諸語を対象とした記述で旧来当然のようにおこなわれてきた動詞の屈折範疇の分類（定動詞/分詞/副動詞）はブリヤート語の共時的な記述では必要か。別の枠組を検討すべきか。
- 否定接尾辞 *-gui* はこれまで接尾辞として記述してきたが、動詞（定動詞直説法）・名詞類と語類を越えて接続している点で接語として記述すべきか。

3.1 分詞の主節述語用法は「言いさし」とみなせるか

「言いさし」からさらに発達した段階だと考えたい。

モンゴル諸語全体を見渡した場合、南西部では副動詞の「言いさし」が、東北部では分詞の「言いさし」がそれぞれ発達したと考えるときれいに類型化できる。なおかつ、モンゴル語やダグール語では一部の形式を除き分詞の主節述語用法に制限があることを考えると、定動詞直説法 vs. 分詞の機能的差異を「言いさし」で説明することができる。

しかしブリヤート語についていえば、分詞の主節述語用法を「言いさし」と定義することにあまり利点はなさそうだと現時点では考えている。Malchukov (2013) の動詞化モデルを適用した山越 (2017) で述べた通り、分詞は高度に定動詞化しており、周辺言語の分詞の主節述語用法と比べ機能面でも定動

詞直説法との差異が見られない（山越 2017: 85）ためである。「言いさし」からさらに発達して定動詞化したと考えると、本発表で扱った本来の定動詞直説法の特徴も、分詞の発達に従って引き起こされたと説明ができる。

3.2 「定動詞/分詞/副動詞」分類の是非

上述の通りブリヤート語では分詞が高度に定動詞化しているとみなす場合、分詞と定動詞という範疇を区別して記述する必要があるのかどうかも検討する必要がある⁴。非主節述語専用形式である副動詞という範疇は認めてよさそうである。

定動詞直説法と分詞の境界については、非主節述語で用いられるか否かという点で両者には差異があるため、境界をひくこと自体は妥当と考える。ただし、表 3 右のように主節述語として用いられるものすべてを定動詞直説法とみなし、その下位分類として主節述語専用範疇（表 3 右「文末専用形」＝従来の直説法）と、名詞修飾・名詞節述語としても用いられる範疇（表 3 右「文末・分詞形」＝従来の分詞）に分けるという分類もありうる⁵。

表 3. ブリヤート語の動詞屈折範疇（末尾のアルファベットは左右の表の間で対応する範疇を示す）

従来の枠組				考えられうる別の枠組（山越 2019 を一部修正）			
定動詞		分詞（形動詞） ^c	副動詞 ^d	定動詞			副動詞 ^d
希求法 ^a	直説法 ^b			希求法 ^a	直説法		
				文末専用形 ^b	文末・分詞形 ^c		

モンゴル諸語間の比較対照が容易なのは従来の枠組であるが、より実態に即しているのは山越 (2019) で提案した表 3 右の枠組になろうかと考えている。

3.3 否定接尾辞 *-gui* の扱いとそれにかかわる接辞・接語の記述

否定接尾辞 *-gui* は名詞類・動詞双方に接続する要素となるため、形態的には接語とみなしたほうがよい可能性がある。Yamakoshi (2019) では *-gui* の特徴を次表 4 のように整理し、ホストへの接続によってアクセント位置が移動することを根拠に接語か接尾辞かを区別することを提案した。

表 4. ブリヤート語否定標識 *-gui* のステータス（Yamakoshi 2019: 103 に基づく）

パラメータ	否定標識 <i>-gui</i>	接語的 (S) か接辞的か (E)
音声的休止	×	S
ホストのアクセント移動	○	S
母音調和	×	E
ホストの選択制限	×	E
さらなる接辞の接続	○	S
ホストとの間への他要素挿入	×	S

⁴ 従来のモンゴル諸語における動詞屈折の記述は、定動詞/分詞/副動詞の 3 範疇（もしくは定動詞をさらに直説法/希求法に分けて 4 範疇）に分類することが基本的枠組になっている。その一方でモンゴル諸語のうち南西部に分布する言語では分詞の主節述語用法がほぼないため、それらを対象とした近年の参照文法（たとえば Field 1997, Slater 2003, Fried 2010）では動詞の屈折を *finite/non-finite* に二分する記述が近年見られるようになってきた。

⁵ 似た枠組みによる記述として、宮古語伊良部島方言の動詞の屈折について、いわゆる連体形を定動詞直説法基本形とし、主節述語専用形式である確信形とあわせて定動詞直説法とする下地 (2018) がある。ただし当該言語では確信形は基本形をもとに形成されているため、両者を別範疇として大別する動機自体がブリヤート語よりも弱い。

(参考) キリル文字正書法	分かち書きせず	S
(参考) モンゴル文字表記	分かち書き	E (Word-like)

現時点ではこの基準を変えることは想定していない。ただし、接語にはより接辞的な、接辞にはより接語的な特徴をもつ形態素があり、なおかつ梅谷 (2020) がモンゴル語について指摘しているように、それらをきれいに階層化することが難しい可能性が高い。これらの記述方法を検討する必要がある。

4. おわりに

以上、ブリヤート語において名詞的な特徴をもつ動詞屈折範疇である分詞と定動詞直説法とが主節述語位置では多くの特徴を共有していること、とくに本来名詞類にしか接続しない否定接尾辞 -gui の接続、同じく名詞類にしか後続しない小詞 =jum の後続が定動詞直説法にも確認されることから、分詞が定動詞的になったというだけでなく、定動詞直説法も分詞の特徴を獲得するという双方向の変化であることを述べた。そのうえで、関連する記述上の要検討課題（「言いさし」との関連、動詞屈折体系の記述、否定接尾辞 -gui およびその他の接尾辞・接語の記述）についてとりあげた。検討課題は体系性の保持と記述の目的（語族内の比較か否か、etc.）を念頭に、慎重に検討を重ねたい。

謝辞

本発表にかかわる言語データを提供してくださった話者のドガルマー氏 (1933 年生まれ)、ドンドグ氏 (1969 年生まれ) および長い現地調査で便宜を図ってくださった中国内モンゴル自治区フルンボイル市エウエンキ族自治旗シネヘン西ソムの方々に末尾ながら深い感謝の意を表する。本発表は JSPS 科研費 JP17K02714, JP18H0578 の成果の一部である。

略号一覧

1,2,3: 人称, ACC: 対格, CAUS: 使役, COND: 条件, CVB: 副動詞, DAT: 与位格, E: 挿入音, FUT: 未来, GEN: 属格, HBT: 習慣, HON: 敬称, IND: 直説法, INDF: 不定, INS: 具格, IPFV: 不完了, MOD: モーダル, NEG: 否定, NOM: 主格, NPST: 非過去, PASS: 受動, PFV: 完了, PL: 複数, PN: 固有名詞, POSS: 所有, PROP: ~持ちの, PRS: 現在, PST: 過去, PTCP: 分詞, Q: 疑問, REFL: 再帰, S: 主語, SFP: 文末小詞, SG: 単数, SIM: 同時

参考文献

- 恩和巴图. (ed.) 1988. 『达斡尔语和蒙古语』 呼和浩特: 内蒙古人民出版社.
- Field, Kenneth L. 1997. *A Grammatical Overview of Santa Mongolian*. Doctoral dissertation at University of California, Santa Barbara.
- Fried, Robert Wayne. 2010. *A Grammar of Bao'an Tu, A Mongolic Language of Northwest China*. Ph.D. dissertation of the University of Buffalo, State University of New York.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims. 2010. *Understanding Morphology*. (Second Edition) New York: Routledge.
- ジンガン. 2010. 「モンゴル語のモダリティ：コーパスに基づく記述的研究」東京外国語大学博士論文. <http://hdl.handle.net/10108/64060>
- Malchukov, Andrej L. 2013. Verbalization and Insubordination in Siberian Languages. In: Martine Robbeets & Hubert Cuyckens (eds.) *Shared Grammaticalization*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.177–208.
- 向井晋一. 2001. 「モンゴル語の焦点調整形式」『日本モンゴル学会紀要』31: 69–90.
- 下地理則. 2018. 『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』東京: くろしお出版.
- Slater, Keith W. 2003. *A Grammar of Mangghuer: A Mongolic Language of China's Qinghai-Gansu Sprachbund*. London and New York: Routledge Curzon.
- 梅谷博之. 2020. 「モンゴル語におけるクリティックに分類される諸要素の特徴」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究 (2)」2020 年度第 2 回研究会 (通算第 4 回目). 2020-11-14. オンライン開催. (研究会配布資料)
- 山田洋平. 2019. 「ダグール語の述部の諸相」東京外国語大学博士論文. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/94834>
- 山越康裕. 2017. 「シネヘン・ブリヤート語の 2 種類の未来表現：分詞の定動詞化に関する 3 類型」『北方人文研究』10: 79–96.
- 山越康裕. 2019. 「モンゴル諸語の動詞屈折体系の記述を再考する：2014 年以降の研究の流れを内省して」札幌学院大学言語学談話会第 100 回記念会. 2019-09-15. 於 札幌学院大学. 参考 URL: <https://bit.ly/2Yp6bFT>
- Yamakoshi, Yasuhiro. 2019. A suffix or a clitic? the negative marker “_gui” in Buryat. *Proceedings of the 14th Seoul International Altaistic Conference: Grammars of Altaic Languages*. Seoul: The Altaic Society of Korea. pp.93–108.
- Yamakoshi, Yasuhiro. 2020. Online text of Mongolic languages. (managed by Information Resources Center at Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies). URL: <https://mongolictxt.aa-ken.jp/> [2021-10-14 アクセス]
- 山越康裕. 2021. 「シロンゴル・モンゴル語条件副動詞の「言いさし」(insubordination) の発達」『津曲敏郎先生古稀記念集』網走: 北海道立北方民族博物館. pp.125–145.